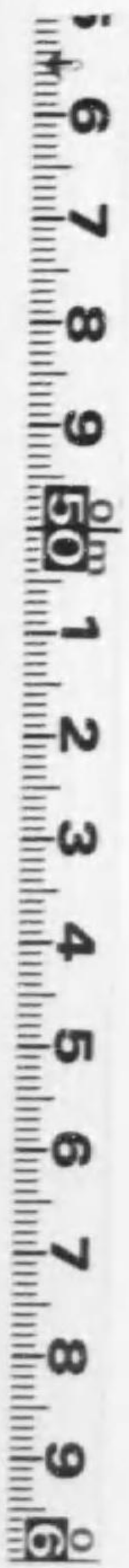
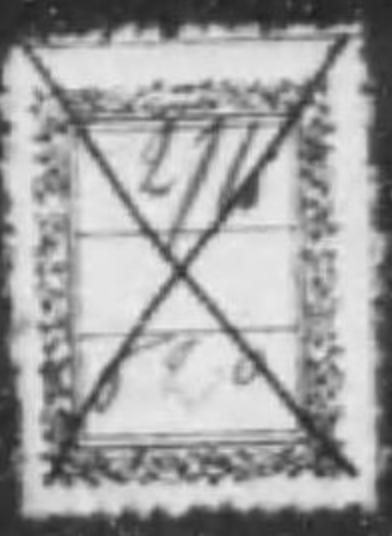


特116

776



始



實  
行  
易  
神  
傳  
と  
手  
品  
全  
一  
冊

特116  
776



容實  
易行  
秘傳  
と手品  
全一冊

大正  
3. 6. 19  
内交

上 目 水 神傳の部

。白髪を黒くする法。毛髪を黒くする法。赤白髪を黒くする法。色黒き人をして白くする法。酒癖いよなる法。酒を飲みてよはがる法。小兒の夜啼を止る術。子なき婦人子をもうくる法。顔の黒子を去る術。百日百夜百擾せしめて氣力衰へざる法。身の氣を去る法。寒中水にて凍れざる法。足に豆の出来たるを治する法。胎中の子の男女を知る法。破鼻を治する法。顔のきめをとまかにする法。髪の色ゆげたる變法。腫物のおとをのりやくする法。白なまを治す藥法。雪や寒夜に手足の凍れぬ法。声かたて出ざる時即生し言せし法。口中の痛みを止る秘法。焼どの奇法。尤に咬れたるを治する法。ニキビを治す奇法。髪を長く光沢あり縮むを直す法。髪のもはへる油製法。遠法の鮫肌を治する法。寢小便を治す法。走る時息の切れぬ

法。水に湯せざる薬法。ゆで玉子を種々の形に切る秘法。  
 年當箱草の移り香をふせぐ法。豆腐に書画の筆を落さ  
 る法。鍋釜おき所にて飯を炊ぐ法。衣類に油の付きた  
 るを落す法。衣服に脛具の付たるを落す法。衣類に膿  
 血の付たるを落す法。竹を帚木かにする法。銀物の色の  
 變らぬ押やうの法。錫の道具を新らしくする  
 法。草の類汚れたるを洗ひ落す法。鍋釜の鉄氣即坐  
 に止まり法。琉球墨壺の垢を落す法。磁石おき所にて  
 物を磨く法。墨壺に油の付きたるを落す法。墨壺の  
 とぼれたるを落す法。鈍刀を切れるやうにする法。鉄針のさ  
 ややろ秘法。障紙の破れかゝる法。麦藁木帽子を洗ふ法。硝  
 子を切る法。花火を揃へる法。風雨に消えざる松火の法  
 暗夜に何文字までも夜光を出す法。竹に焼書画をあり  
 はす法。炭の長くたもつ傳。油虫を去る法。白駒顔を  
 紋りよ咲かす法。木の本末を知る法。桃の實を割る法。

梅干を切る法。女の相を見て多淫なるを知る法。染たる畫  
 を即坐に白出まする法。人の眼色を見て心の中を知る法。顔  
 の皺をのばし色を白くする法。とげゆきの妙法。汗をかかぬ  
 秘法。血止紙の製法。痔漏を治す法。俄に耳の聞えざ  
 るを治する法。

下編 干品の部

紙片を卵殼に變ずる術。陰火を昇天せしむる法。水  
 中に注玉子を遊す術。生殺自在の術。火渡りの傳。水面  
 に錢を浮す術。蝴蝶を舞はす術。水中発火の法。遠  
 摩の活動秘術。水中に光を発する術。豆腐を粉結  
 びにする術。燃えざる紙の傳。雪よけて酒の燭をなす術。  
 人身隱顯術。水中より各色の火焰を出す術。飄浮を舞  
 踏せしむる法。水中玉子を舞はす術。玉子を安かす術  
 。八寸針を舌に通して見する術。

上編 種傳之部

白髪を黒くする法

桐の木を皮共黒く焼き、胡桃も同じく黒く焼きたるものに菰米との三味を粉まして蠟まてゆるくぬりてぬるべしいか程の白髪まても黒く染まりて恰も少年の如くとなるべし

毛髪を黒くする法

木麩子北丸八厘を大割まして内十丸四厘は黒く焼き疾り十丸四厘はかはけ色ま炒り銅のせん屑十丸をかはけまて炒り酢ま入れて又いり再び酢ま入るれば右のせんくづ緑青色となる幾度ある程よく之を以て毛髪を染むれば黒色となること妙なり但し焼きたるものと炒りたるものと三品は混合することを怠るべからず

色白き美人となる法

白瓜の種子むしくは冬瓜の種子を五面と白楊皮或白桃  
花四面以上の三味を細末にし食後に一さじ宛日三度  
飲むべし顔の色を白くせんと欲せば白瓜の種子を加ふべし  
くら色ならんことを欲せば桃花を加ふべし十日子して面白く  
五十日子して千疋と云に好む肌の色もなるなり不思儀の神  
術なりとす。

色黒き人を白くする法

冬瓜一個を皮を去り切へぎて酒一升五合と  
米一升とを以て煮爛りかし滓をこしこりて又煮火つめて膏  
となして之を毎夜塗るべし白玉如く面色白くたるなり

酒嫌ひになる法

白犬の乳を酒三升取すべしいか程の大酒家も思ち下  
戸となること妙なり

酒を飲みてよぼざる法

小豆の花と葉を一つにして陰干にすること百日よて

細末とし一匙を服すべしいかほど大酒して酔ふことな  
し赤葛花を等分に加ふるもよし

小兒の夜啼を止る術

犬の毛を毛この袋に入れて小兒の背の上にかけて置べし  
又は牛の糞を一塊取りて席の下におくべし快す母並に  
乳母も知らしむべからず

子なき婦人子をもうくる法

旧二月丁亥の日杏花と桃花とを取て陰干しして細末と  
し戊子の日に酌みたるの灰まで一さじを服すべし日三度  
飲むべし必ず子出来ると言ひ傳ふ

疥癩の黒子を去る術

七月七日の午後廿九の葉を七枚取りて直ちに北側の南  
向の堂へ入りて南より立てて七枚の葉を以て黒子を搽ふべし  
さすれば悉く取れるなり

百日百夜寝ずして氣力衰へざる法

晝夜お寝がらること違日なれば氣力つかれて事を勉む  
ることなりかたき時は牡蠣のかりを粉にして飲むべし氣力  
つよくなりて事をつとむるに益支なし

身の氣を去る法

白鳥の羽の蒸す水銀を入れて下帯に結ひつけて置く  
皆風死すべし又液を身に氣のある時は一夜外へ出し地上  
に直ちに下帯肌着をひくゆ置くべし悉く死す

寒中水中にて凍じざる法

寒中川などを渡りて凍るるを防ぐには干足は古酒  
を塗り又胡椒をカキて渡るべし何程寒氣よても凍り  
ることなき良法なり

足は豆の出来たるを治する法

豆を治するには烟草の吸殻を飯粒よてよく煉りて紙  
よ入れて塗りて其骨所は張りおけば奇妙は直るなり  
胎内の子の男か女を知る法

夫の年齢と妊婦の年の数と合せて九拂にはらひて残  
る散下ならぬ女子半たらば男の子と知るべし九拂よして  
も餘る時は六十一歳を引いて残る所の数を又九拂よまひ

臍鼻を治する法

自身の小便をするとき其小便のさめざるを以て西の腋  
の下を毎日洗ふべし度々洗へば自ら治癒す

顔のきめをこまかにする法

毎朝顔を洗ひて玉子の白味をぬりてよく拭ひ取るべし  
度々かんの如くすればきめこまかになると共につやの出づる  
こと妙なり

髪をぬけがらる薬法

桑白皮四十斤を水よて煎じかすを去りて髪を洗へば自  
然に髪ぬけがらるなり

腫物のおとをよつやよくする法

顔その他くさかさの類いえたるおとをよしきは胡椒を



少し加へてすりぬるべし

白なますりを治す薬法

硫黄 輕粉 杏仁 右の三色を等分して粉にし生姜の  
絞り汁にてぬりつけくれば妙に治す

雪中寒夜に手足の凍れぬ法

胡椒を二つに割りてほうろくにこよく炒りとかし紙にて  
氣のぬけぬやうに包み臍より敷いて居るべし尤も平生手  
習または酸漿飲 吐言古などたす人は貯ふべし甚しき寒  
氣も習ええざること妙なり

聲がれ出て出ざる時即坐し声を出す法

謠曲又は唱歌 義太夫等して声がれ出て出ざる時は大根の絞り  
汁にて生薑のおろしたるを以し加へてぬりて飲むべし声  
もとの如くに出づべきなり

口中の痛みを止る秘法

口中はれ痛むものは生茄子の皮を黒焼にして砂糖密して

よくぬり合せて含むべし暫しの内は痛も去り腫も引こと妙な  
て惣じてはぐきのはれ一切に用ゐて効ありし生茄子をき  
時は茄子の葉を同ゆべし

焼どの奇法

石膏 滑石 等分 玉子 白味 以上の三味をよくぬり合せて  
局部へぬりつけぬりし立所に痛み止る 又法 右の薬急に  
ぬめかねたる場合ははやくどの局部へ燈し油をぬり其の上に  
鹽をぬりつけぬりし これまた痛止まりて治すこと妙なり

犬に咬れたるを治す法

犬に咬れたるときは砂糖を咬たる所へ塗りてよし

ニキビを治す奇法

面癩を治するには密陀僧を粉にして女の乳汁にてとき寝  
る時に面へ塗り明くる日洗ひ落すべし かくこ三度もす  
れば治するものなり

髪を長くし元氣あり縮毛を直す種傳

麻の葉を水で洗ひ乾かし常には洗ふべし赤きを直すには桐の木を煎じ一洗ふべし黒くなるべきなり

髪を毛生へる油製法

蜀椒 白芷 川芎 各十兩 蔓荊子 零陵 川烏 頭各十兩  
この六味を皆生じて刻みて絹子で包み白絞りの油に廿一日程浸しおきて一日三度宛頭の油はけたる如くなり付くべしこの油何処かつけても思ひ髪はゆるなり故に外の所もつけぬやうにすべきなり

皴肌を治す法

行水の湯の中へ酒一升を入れ大凡廿一日續けて洗ふべし肌目こまかくなり皴肌を治す

寢小便を治する法

鶏の脇を黒焼し白湯にて用ゆべし治すること妙なり  
走る時に息の切れぬ法

走る時息の切れぬ法は走り出しの時より態と呼吸を荒くするなりいかほど走りても息の切れぬことなし  
參を合みたる尚をいし

水に渴せざる藥法

甘草 薄荷 荷 葛粉(蒸す) 鹽 白梅 干各一兩 烏梅 一匁  
五分茯苓 二兩をわして刻み二面五分右の藥味を細末にし指の頭程を丸し一日三粒宛服用すべし

ゆで玉子を種々の形に切る種傳

先玉子を菊又は玉子の形となさんと思はし卵を煮ぬきて皮をむき酢につけてをき暫らくして取出し菊なり桔梗なりには切形し兩玉子をおせば黄味じやとはみいで八重菊桔梗まなすを料理よつかふなり

并當箱の移り香をふせぐ法

并當箱の移り香は甚だ不快なるものなり  
白米類 野米の香を焼たるもつを入れて久しき時は流のうつり香  
重箱 菜よう

ワリ殊に百... 味の変わり易きものなりかくの如き時は無常會  
竹箱に煮漬... に入れて上に梅干三四又は五六見合せて入  
れ置くと... 移り香をふせぎ飯菜等は二三日を過す  
ても味のかはふことなし

豆腐梅子書画を書き落さるる法

紅よても墨よても酢よてもよく解き古筆を少し入れ何  
にても豆腐の上にかくなり煮てもはげることなし

鍋釜なき所よて飯を炊く法

山中又は野中よて米はあれども鍋釜なくして飯を炊きや  
うなき時は其辺の清き土地を五寸ばかり掘り米をこもに  
包み其の中へ埋めよく土をまぜ其辺の草木大葉を集め  
其上にて焼き暫らくして掘出し見れば加減よき飯となる

衣類よ油の付きたるを落す法

油の衣服に付たるは大根のおろしたるを油の付たるを取り

その上にも竹つけ置き熱湯よて洗ひ落すべしかくすれば油  
の落つること妙なり

衣類よ繪具の付たるを落す法

もし過りて衣類に青黛胡粉緑青等繪具の付きた  
るときは水杏ノ種子をのみくだき其の上に塗り水を以て洗  
ふべし又膠を煎じて是を結まひたしとよて半日程湯  
よて洗ふもよし

衣類に膿血の付たるを落す法

衣類に膿血の付たるを落す法は膠水よて洗ふべし

竹を三木かにする法

竹をいらためて諸の細工よつかふには大竹をきり竹のは  
らを割り去り虎杖をこまかに刻み古の竹に合せて湯よ入  
れて其汁よて煮ること二時間計りにて取出せば竹よ木か  
たること心のままなり

銀箔の色の変らぬ押やうの法

銀箔は早くさびるものにて黒くなるをとりぬるには銀箔を押したる上に懸る水をうすく引とき八九しきさびず

錫の道臭くもりたるを新しくする法

錫の道臭のくろみ古びたるは砥の粉の細末又は石灰を併て磨くべし

草の類汚れたるを洗ひ落す法

草類のよごれたるを洗す又は糠糠にてしき洗ふべし和らぎて汚水落つるなり

鍋釜の鉄氣即坐に止まる法

新しき鍋釜の鉄氣を止めるには先鍋の内にて蒿をたき灰となしさましをきて後灰を取去り鍋の内へ油をぬりかまごの下にぬる火をおきて油氣を乾かすべし

琉球壘の垢を落す法

琉球たたみの汚れたるは橙を小口切して是れをゆで、水と少し交せて洗へば新しくなるべし

磁石なき所にて又物を磨く法

磁石なき処にて又物を磨くには古き瓦をよく焼きて是を以て磨くべし甚よし

墨に油の付たるを落す法

墨に油の付きたるを落すには即坐に水を多くかくれば油水より浮ぶを拭ひ去るべし但し少間此は落ちぬるなり

墨に墨のこぼれたるを落しやうの法

たたみに墨のこぼれたるは水をかけてふけば墨も忽ちたたみの目へしみ込みて悪し其儘にたしおき、墨のよく乾きたる後新しき草履にてこするべし

鈍刀を切れるやうにする法

五六合鹽に造りたる古味噌に極上の白燐硝を粉にして交ぜ是を厚くぬりて炭火より赤くなる迄焼きぬる湯よつけ薬をおとし磁石にて丹をつくればよく焼きたるものは鈍刀も皆鋼鐵の如くかたくなるべし

鉄針のさしこむる秘法

鉄針の錆を止るに松の木の炭工をさかむべし決してさびることなし

障子紙の破れを治る法

障子紙は函風等のあたりてはなれやオキものたれど糊の中へ酢を入れてこれにて程よく解きて張るべし決してはなれることなし

麦藁帽子を洗ふ法

先づ刷毛に清水をつけて帽子の汚れをよく洗ひ落しこれに箱の中に入れ其の下に硫黄を燃したる器をおき箱の蓋をなしこれをおすべかくなれば硫黄の煙のためきれいにあり新らしきものとなり

硝子を切る法

硝子を切るには火打石の角にて摺切るべし又硝子に水銀を引く又は硝子の上に衆の汁をつけるなりそれにて水銀

を引けば硝子のしこ自由につくものなり

花を挿へる秘傳

しだれ柳の法は硝子十斤 硫黄二斤七分 灰三斤七分

鬼こぶしの法は硝子十斤 硫黄一斤八分 灰三斤 硫黄九分

山吹の法は硝子九分 硫黄三分 硫黄一分九分 灰三分一分

右各別子交せて作るべし

線香花火の法は硝子一斤 硫黄四斤 灰一分 松煙二分五厘を糊にてこねて藪を巻きて干て用ひべし

風雨を消えざる松火の法

藪四五本に木綿を巻き松脂をぬりて乾のけ束ねて松明とすれば雨も消えざるなり

暗夜に何文字をも夜光を出す法

烏賊の墨を器物にたくはへ陰干すしなまぐさき氣を去り能く乾かすかた糸と一所にして至極よき墨をすり右のいかの墨と紅とを入れ念佛なり題目なり書き

香爐に抹香を澤山もりて五寸程へだてて香をたくべし  
火よく移りし時見れば抹香の火といかの墨の光りと一所に混  
じて光明を放つこと妙なり

竹に焼書画をあらはす法

硫酸鉄を少しの水にとき好みの書画をかかけば黒色であ  
らはる瘡この時火の上にて炙る 又消石精に一倍の水を加  
へて稀薄まじして書けば赤褐色に現はれるものなり

炭の長くたもつ傳

炭の俵のまま上より水を多くかけをきて遣ふべし火の  
たつておそくそか上キ子付かすして甚だ徳用なり

油虫を去る傳

草花等にのきたる油虫は煙草下の莖を煎じ其水をか  
くるがよし

白朝顔を絞りよ咲かす法

明朝咲んと思ふ前晩に紅をまわつて茶の先へまじ

置べし朝ひらくとき絞りよなり咲くこと妙なり

木の本来を知る法

木の本来を知るよは木を少し削りて墨を付けてみるべし其  
カ墨ににじむ方は末なりと知るべし 世に家の逆柱を忌むも  
のなれば其法を見定むるには良法なり

桃の實を割る種傳

桃の實をぐるみ切んとするまは包丁の外に燈心をすり  
つけて切れば手際よくきれなるなり

梅干を切る法

庖丁の刃に唐もろこしをすりつけて切ればすかすかと手際よく  
切れるなりもし唐もろかしなき時は燈心までもよし

女の相を見て多知なるを法

女の目長く一か目は目よして猪の如く人を見るもくはゆがず  
淫乱なりすべて人の目利は眼より依りて考ふるにかくれさる  
もくなり

染たる歯を即坐又白歯にする法

笹の葉を黒焼にして灰となりざるを指のはうにつけて磨けばおはぐり忽ち落ちて白くあるべし

人の眼色を見て心の中を知る法

人の心を察するは眼を見るべし上を見ては其の心高ぶりたるあり下を見るは心低感し思ふことあり又眼点じ動くは言はずして心疑ひ思ふことあるなりこなたを横様にみるは故ま益なき心と見るべし

顔の皺を消す法

かす瓜の實と皮とを去りて三兩と杏の種子一兩猪油一面右の三色をつきまぜて毎夜顔にぬるべし冬も顔に皺のよることなし色白くなるべし

とげぬきの妙法

手足其の他とげの立たる時は蟻螂を秋の頃捕りまきて陰干しなしをき、其かまきりを細末にし粒の飯よて

よくねりとげのたちたる局部へはり置くべし自然にぬけること妙なり

汗をかきぬ妙法

氷屑の玉或は散珠の玉よても晴の中へ入れ上より布にて腹帯をして歩行すれば汗いびきず

血止紙の製法

夏草 人參 紫豆 麒麟血 各式女 土龍霜三分 是はもぐりもちの黒やきなり以上の品を粉にしてすりかけ又は服するもよし一平生血落りするもよし

痔漏を治す法

はれ痛み下血するには山椒の實を細末にして服すべし又むんげの根を煎じて洗ふあよし花を粉にしてぬるもよし

俄に耳の聞えぬを治す法

香附子をよくいりて細末にし大根をせんじ其汁を飲せ

下編 手品の部

紙片を卵殻に変ずる術

演技者はまつ丸めたる紙片を観衆に示し諸君この紙を扇の上でやり動かしますと漸次大きくなり終には幾何の卵となりますと口上を述べ右手に扇をひき持ちこの上に彼の紙片を載せ軽く動かす時は終は大きくなりて卵の形をまじはすべし

(種あかし) 鶏卵を取りて何れかの一端に針の先にて穴を穿ち此の穴より白味黄味を吸ひ取りその殻を酢の中に浸し四週くこと一晝夜程ふれば外皮の硬き部分はほろくとなりてはぎ去ることを得べきを以て内層の薄皮のみは頗る柔軟のものとなり之を丸めても破るゝことなし之を以て紙の紙片に擬するものとす 而してこの薄皮は酢の中より

取り出したる初めに於ては彈力あるものあれば丸めんとしても能はざるの憾みあり二三日を經過したるもなまて乾きたるものをよしとす

陰火を昇天せしむる法

此の技は暗夜などに廣き野原に於て行へば最も妙なるべし 奇術手品といふ程ならねどもまつ種より説明すれば雁皮紙を取り之に鈎蒭粉を以て作りたる糊を塗布し之を細長き袋を製し其の下部となるべき方に細き竹の輪を周圍の口に結びて貼付し輪の直径として最も細く成るべく重量の輕き針金を渡し強性のマニコールに綿を入りて浸したるものをこれに結び付け之に火を点ずる時は球内の空気がこれに熱して軽くあるものなれば球は漸次上昇して空中に電揚すかくてマルコポールを燃焼しつゝするときの火は儘くを以て球は下降を始むべし之は少しも風なき夜をよしとす 球は長さ三尺以内たるべし



水中に生玉工を浮す術

コップの中に清水を満て之に鶏卵を投ずと虽も多量  
の食塩若しくは白砂糖を混入して攪拌するときは  
玉子は忽ち浮遊して水面に出づるに至る是れその液の地  
重より因れるものなり

注殺自在の術

技演者は先づ十字架上に縛せらるる其の側らに明光々  
たる槍を以て推ゆる人あるを見る。口上言は禱の批目正  
しくここに御覧に供する技は之なる十字架上の人は之  
なる長槍を持ちたる人に突かれ血が夥しく逆り出でて  
實に見るに忍びぬ惨状を呈出致しますが然しや加て  
獲生するといふ奇術でございます。この口上終るや、禱を  
十字にまやどりたる助手は穂先を十字架上の人の胸部  
目かけてエイと突く。突かれて流血滾々として逆り苦悶  
苦痛の状見る者をして身も栗を生ぜしむ弱き婦人

は仰ぎ見るものなり。口上言は更子語を奏して諸君斯くの  
如く死んだ様子ですがこの儘獲生しない時は殺人罪とな  
りますから獲生せしめねばなりませんよく御覧の程を願ひ  
ます。かく述べて血を拭い創口を包みて繃帯を捲き其の  
まゝ起して氣付薬など與へよろしく介抱するなりや加て  
獲生し元氣づくま至りここに幕を閉するなり

(種おかし)

槍は外觀上に於て普通の物に異ならざる  
も其の實は外皮はゴムにて製したるものにて此に銀の  
箔を貼りてその内部には紅色の液を以て充たしたるものとす  
而してその穂先の根元には微細の孔を穿ちこれに適當の蓋  
をなし胸部を突く時はゴムはために壓縮し内部に貯へあ  
る紅色の液を壓迫するを以てその細孔を破りここより紅色  
の液の逆出するものなり。恰も此の方法を應用するときはハ  
割腹咽突其他之に類似の技を演ぜらるべきなり

火渡りの傳

演技者の服装は白木綿子で作りたる着物股引襦袢  
足袋を穿ち火火々と燃に居此る火焰の中を緩歩し往來  
すること二三回而して些少の火傷もせざるは誠にも不思議  
の次第といふべしげは神明の加護か佛徳の冥助か觀客  
は手に汗して見物す

（種あかし） 演技者の着せる白装束は前に硝酸安  
母尼亞を取りて二十倍の水に溶解し之に浸し置くと救  
時間より取り上げ其のまゝ日光に乾かして後之を全身  
に纏ひ準備全く終了の後藁に石油を注ぎたるものを長  
さ三間内外幅一間ばかりの幅員より布き此の上に障子を  
かけ渡し藁に火を点じて之を燃し初め猛火の起りしとき定  
早に此の障子の骨を渡りゆくべし着衣は少しも焼けずす少  
しの火傷もせざるなり

水面に錢を浮す術

一厘錢の裏面を砥石にて磨り之を平にして薄くし  
之に生蠟をぬりてコップに水を注ぎ水の静止したるとき静か  
に水面より置くときは錢は浮びて決して沈むことなし

蝴蝶を舞はす術

演技者は口上を速く曰く「尺今の年少女諸君の御慰みに  
に御目子掛けます」そのを扇に持ちて居ります私この扇を  
ひろげて扇ぎますれば直より二疋の蝶々が何処からともなく  
飛んで来てこの扇で煽いで居る間は何処へも飛んで行きま  
せん演技者は扇を取りて或は小さく或は大きく扇ぐ時は遠  
くはなるることなし子供達は皆拍手喝采すべし  
（種あかし） 此の蝶々は最も軽き紙にて作りしもの  
にて彩色せるものなりざるべからず而して極めて繊細なる

糸例へば蕭をときたる糸を二三本を撚り合せて岸色  
其の他目子つき加たまき色にて染めたるものを以て一端

は病の親骨より結び付け他の一端は蝶の脚の中央より結び付けたるものにして病を以て病や毎に糸に引かれ蝶の尾が如くに見ゆるなり 而してこの技を行ふ時は徐々にせざれば或は糸の切断を来して失敗を見らるゝも限らざれば注意を要す

### 水中発火の法

先づ大壺に清水を盛り其の側に一何のユツプを置き此なる大壺の清水をこれなるユツプより移しまして其の中より紙を燃やして御覧よ入水す着客諸君の中には足今のは水であるまいとの仰せですが正し水に相違ありませぬの證拠はこれ通り私が呑んで巾目も掛けます毒も薬も入つて居りませぬ させてこれなる紙も何等の装置は必しありません斯様にもやましてやはらげ再び展ばしめてその端を一寸揃まんで置きます 之を水に浸しますと斯様に焰が炎々と立ち登るのですと口上を速くおなり

(種あかし) 水には何の装置もなげれども紙を揉みて其の端をつまむ時その一端にソーダ・ソルト云へる金属原子素を包み込め之を水に浸すときは水の中の酸素と化合して発火するものなり

### 遠慮の活動紙は

この遠慮は如何にして活動するや高置の上に置く時は轉々として四方に馳せ廻り或は静し或は活動し或は巡回するなど其の動作の敏捷なること神変不思議なり (種あかし) 此の遠慮は初め而分し中央より上下に分離するを得るものに於て内部は空虚なり故に之を動かして其の内に南京錠を入れば再び蓋をとりなし以て活動せしむるものとす

### 水中に光を發する法

此の大なる硝子箱より斯様に水を一杯入れて置きますしかが暗い些敷に於て見ますればこの水中に明燈々と

光りを発するものが明かに認められますからよく御目を  
とめて御覧あらんことを願ひます且つ私しは其の光りを  
捕へましても必しも火傷等をしてほしくないといふことも申認めに  
なりたいのですかくて演技者は手を水中に入るものと共に  
激しき光りを発して白熱が下を見るの感あらしむべし  
(種あかし) 先づ左右の手に各一尺の石英を握りて水  
中に於て激しく摩擦するときは光を発するものなりそ  
の輝くことの遠じきは實に予想の外にありといふべし

### 豆腐を輪結びにする法

演技者はまづ平鉢一個の豆腐を入れた之を肴  
客に示しつこの鉢の中なる豆腐は真正の者でござい  
まして他のものではありませんふし疑がなりましたは私も当  
惑いたしますから何卒肴客諸君に於て充分に申見と  
めあらんことを願ひます左様ですか真正の豆腐は相違  
ないことが證據たてられたらばいよく本藝に取りかか

ります先づ斯様にこの豆腐を細く切りましてこれを斯様に  
両手の指に持ちまして斯う輪を結びました……お妙玉み  
に従ひまして今一回結んでお目も掛けますここを放てか  
肴客は大喝采

(種あかし) 此の豆腐は真正の物に相違なきも之を六七  
枚の檜の葉と共に煮るべし斯くの如くするとおハ之を細  
く切ることも崩れし患なきを以ていかやうにも結ぶことを  
得るものなり

### 燃えざる紙の傳

術者は口上を述べて曰くこれなる白紙ですか之をこの火  
鉢に突々と燃え立つて居ります火中に投じて予等取り  
出しますれば燃えず焼かず少しの焼痕も留めぬといふこ  
とを御覧に入れますとて火鉢の中にて鉛屑などを燃しつ  
ある中に白紙を入れた一端を持ち居り直ちに引きあ  
がるも少しの焼痕を止めずして白紙は依然として白紙な

り満場の喝米破るるが如し

(種あかし) 先づ塙蒭粉を水よことかし泥状となし白紙を板の上に敷せてこれにて刷毛よこ引き以て蒭干よこしたるものなり容易しやけざるものなり

雪よこ酒の爛をたす術

雪を戸外より取り来らしめその時二竹の容器よ入れしめ一は生石灰を入れ雪と見せしむるがために僅よその上部に薄く雪を被ひまづ其の雪よこ取り除きて其の下なる生石灰を雪の如くに見せかけて堀よ上げこれを他の大鉢の中に入れ其の上にて德利と道きこれより雪を入れて德利の三分の二ばかりを埋むべしかこの如くするときには雪は漸次落くるものなれば其の水のためには生石灰に熱を発生しその温度によりて酒をあたたかむるに至るものなり

人身隠顯術

満座の首客は隠顯術とはさておきなりいかなる人が

顯はれいかなる人が隠るるかとは四週に眼を配りて見てありしが中央よは只一枚の障子の周辺のみ如き物の直立せるを知見するのみや加て其の側らに於て濃々として白煙の鼻騰するを見るやこれよつぎて徐々として顯はれいでたるは軍人よして全身悉く現はれ然りし時此方彼方を見廻し又練々として下部よりかくれ消え去りたり次に現はれしは僧侶よして其の次は美人小兒たど續々として現はれ直ちに消え失するなど實よその術の不思議なること言ふばかりなれば首客ははや已に曉をうははれたらんが如く只呆然として不思議とのみ思ひ居るなり

(種あかし) この座敷の四面は皆同一の襖を以て閉て切り其の中央よ立てたる障子の四周の如きものは實は元来よ非ずして大なる鏡をたておけるものなり尤も鏡の前なる疊は鏡に映りて鏡の後の同じ距離に於て同じ疊の如くか如くは見ゆるものなれば首客は天張鏡の立ち居るものとは

氣着くものなし只細き木を以て作りし障子は四辺を立てる  
もの誤認するも誠し理りなり而して鏡の後には階段を  
ニ三級作り置きて異形の粉装をたせる演説者は彼の処  
に隠れ居り顔は水んとする時は徐々としてその階段を下りか  
へんとする時は亦徐々として階段を上るべし

水中より各色の火焰を出だす法

水中より炎々たる火焰の如きもの御覧に入れますが  
ここにありまするは一個のユツプでございますか透明にな  
つて居りますから中とは何せの装置もないことは御覧の  
通りです、これにかやうに水を注ぎますとこれに一片の紙  
を投げ入れますると炎々として赤い焰が燃え上ります、こ  
れを通り又この紙を反古紙に入れまるときの黄色の焰が  
燃え上がりまます、次はこの黒い豆粒の如きものを入れま  
すれば忽ち其の清水は紫の如き色に變じまます所が今  
度これを入れますれば白色の電火の如きものとなりて火

はガルクと旋回を始めますから何卒充分に目をと  
めて御覧あらんことを希望いたします

(種あかし)

この清水は何の装置もなければ混合物も  
なし而して第一着は水中に投げ込めたるものは「ホツタ  
レユーム」又は「ナリユー」の如きものにして第二着目  
は「メシ」又は「ナリユー」の如きものにして第三着目  
にして此の二種の薬品は固形物をなしたるものにして之  
を貯ふるには常に石油などの中に入れをくべし而して之を  
使用せんとする時は石油中に於て取扱ふべく空気中に  
於てせざるやうにすべしかく之を水中に投ずるときは紙片  
を包むは其の實體を音響に見せしめざるやうにたすに  
あり次で紫色に變ぜしものは結晶過磷酸加里  
といふものにして最後に燦光を發して電光の如くに見せ  
たりし清水の如きものは其の實體清水に非ずして純純の  
硫酸を凡そ半分ばかり注ぎおき其の上は無水酒精をば

破酸と同一の量だけ静かに注加したるものとす

水上歩行の術

水上歩行の術は普通の場所にて行はざる難しされど庭前の大池などに之を行ふを得べければ波立たざるを以て面白味少なし此の法は別と和術あるに非ず先が長き針金の線を二条ばかり此の岸より彼方の岸に架け渡し水面下一尺ばかりの所に位置しおくべし即ちこの線を渡り水上を歩行するが如くに見せつつ渡りゆくべし然れどもこの技は最も熟練するに非れば得て行ひかたく性々水中に落つるの失態を免れければ切りに危すべきものなり

飄箏を舞踏せしむる法

根付に用ゆる如き小さき飄箏の口を栓して塞ぎたる物か子供の机上にて舞踏し居たるに子供は學校より帰り来りて不思議氣に眺め居たりければ母は何故この飄箏

はこんなな動きをすかと思へば知らぬ振なり母は口の栓を抜いて内庭に倒まにしておけたるに少許の水と強氣なる数尾の鰻とが庭にいてれば子供は何程と合点したる様子なり之は一才小供を慰むるには面白し

水中鵝卵の舞踏術

先づ清水を盛りたる大壺硝子鉢生鵝卵を瓶上に陳列し諸君の玉手をとれたる硝子鉢に移し置きたる清水中に於て舞踏させて御覧に入れますと口上終つて大壺の水を彼の硝子鉢に移し其の中に鵝卵を入るべし鵝卵はそのまま下底に沈没するを以て玉さん早くいよいよ早く踏りて皆さんに南目まかけよ...は是よたてやめて卵君はブツツリ水上に浮か上るべし而して右に旋回したに回轉し或は沈まんとして沈まらず或は浮ばんとして水面に頭をいぢすなど奇々妙々たり(種々かし)この演技に於て清水と見せかけたるものは

其の實清水に非ずして水一外子鹽酸「一オンス」の割合を以て混じたるものなり之に鶏卵を入るるとき、は周厚にかすを生じ之かためにかくの如く浮沈しつつ旋轉するものなり

玉子を拵かず術

玉子に穴をおけ中の黄味白味を取り去り麵を一足いれおけば墨汁は動き歩くなり穴は一才見えざるやうにすべし

八寸釘を舌に通して見する神傳

図の如くに釘をこしらへ舌をはきみ横にのびたる金をくはへて見すれば舌に通りたる如くに見ゆるなり

大正九年六月十五日印刷  
大正九年六月二十日發行

發行兼編輯人

東京市下谷区中根山岸町  
九拾六番地  
業久保健治

印刷人

全上所  
業久保健治

印刷所

東京市下谷区中根山岸町  
九拾六番地

發行所

全上所  
明陽社



276  
620

終